

インターセックスと性のグラデーション

ー徳島大学総合科学部学部共通科目『健康と福祉』特別講義からー

新 井 祥 (オフィス★怪人社代表)

榎 田 美 雄 (徳島大学総合科学部)

《特別講義の諸データ》

日 時……………2003年10月17日 (金) 午前10時25分～午前11時55分

会 場……………徳島大学新共通教育棟 6 階・創成学習スタジオ

司 会 者……………榎田美雄 (徳島大学総合科学部)

講 演 講 師……………新井 祥 (オフィス★怪人社代表)

主 催……………『健康と福祉』(総合科学部学部共通科目・全学共通教育学部開放科目)

連 絡 先……………榎田美雄(kashida@ias.tokushima-u.ac.jp)

【序文：掲載内容の概要と講演設定意図】

ここに掲載するのは、平成15年10月17日に行われた新井祥氏による講演の記録である。この講演は、徳島大学総合科学部の学部共通科目であり、同時に全学共通教育の学部開放科目の総合科目でもある『健康と福祉』の一環として開催された。「あとがき」に相当する部分に【講演企画者の覚え書き】として授業の準備と実施・結果に関する榎田の覚え書きを添えた。

新井氏の特別講義には、徳島大学学部学生を主とした260人ほどの聴衆が参加した。当時も今も「性同一性障害」に関しては社会的関心が高く、書籍も多数出版されている。一方、「インターセックス」に関しては、より多数の潜在的該当者(カウントの仕方にもよるが2千人に1人という説がある)がいると予想される割には、社会的話題になっている程度は低かった。とはいえ、このような差異の背景には、「インターセックス」という「マイノリ

ティ」の社会的・運動的基盤の弱さがあると思われ、むしろそのような事情があるからこそ、授業で取り上げる価値があると考えられた⁽¹⁾。

また、「インターセックス」を取り上げることは、本授業が「生物学者」と「社会学者」の両授業企画者による学際的共同教育実践として実施されていることから適切なことであった。すなわち、「性」一般の話や「性同一性障害」の話よりも、生物学的な性決定の多様性の話を授業の中に位置づけやすいということが期待された。

さらに、教育的な面からも、「インターセックス」関係者が主張する「性のグラデーション」仮説を考えさせることが本授業にとって有意義であると考えられた。すなわち、人間集合＝{男, 女}という常識的な2分法的理解を、学問の力を利用して再検討させる授業枠組みとして「インターセックス」の話題が適切に思われた。性転換する魚の話から、染色体異常に由来しない人間のさまざまな「インターセックス」の話までを連続して聞かせることで、学際的で自由な思考空間に、学生を引っ張り出す授業の組織化が可能となるように思われたのである。もちろん、大学1年生を中心とした学生が、思春期の特徴として「性的自己自認」に関して「不安」を抱えており、新井氏が話す内容を自分の問題として捉える可能性がある、そういう面から、学生を授業に引きつける効果に期待する部分もあった。

これらのねらいを総合させるテーマとして、インターセックスを授業開始時の話題の核とする講義構成が固まっていた（本稿末尾に資料として掲載されている「シラバス」を参照のこと。話題の流れとしては、学生に身近な話題から世界大の話題へという構成を取った）。

当時、公開の席で発言しているインターセックス当事者は、日本国内では橋本秀雄氏と新井氏の両氏だけだったのではないだろうか。この中から、橋本氏ではなく、新井氏を講師にお願いしたのは、2つの理由（期待と不安）がある。ひとつは、職業的パフォーマー（劇団主宰者）としての新井氏の力量に対する期待であり、もう一つは、橋本氏が強力すぎる話題提供者かも知れなく思えた（詳細は後述）という不安である。

新井氏は、予想通りのパフォーマーぶりで、学生に衝撃を与えてくれた。

じつは、講演終了時に明らかにしてくれた事実であったが、新井氏は「かつら」をかぶって見た目の「男性度」を落として登場してくれたのであった（掲載の写真3枚のうち高野博氏撮影の1枚は2004年夏に『女性自身』から取材を受けた際のものであり、残りの2枚は、時期および撮影者未詳である。これらはいずれも2003年の授業時のものではない）。講演直後に学生から回収したコメントシートには「普通の人だった」「違和感を感じなかった」という感想が頻出していたが、それこそは、新井氏がねらって呈示した「自己像」であったのだ。新井氏の解説によれば、都会の大学祭等に呼ばれる場合には「かつら」なしで登場しても「拒否感」少なく受け入れてもらえるが、[徳島のような]田舎では、まず「女性っぽい」外見で登場しないとインターセックスというだけで「拒否感」を最初にもたれてしまい、講演がうまくいかない。そこで、「かつら」をかぶっていったのだ、という話だった。新井氏には、学期終了時の学生アンケートでも、たいへん多くの学生から肯定的評価が集まっており、上記の期待はかなえられたといえよう。

橋本氏が強力すぎる話題提供者であるように見えたという点についても、少し説明が必要であろう。『健康と福祉』の授業は、啓蒙的側面はもつものの、啓蒙を主目的とした授業ではない。「シラバス」にもあるようにそれは「社会的なことがらを学際的・総合科学部的に考える」ということを主目的としている。この点、書物等でみる橋本氏のパフォーマンスは、聴衆の共感をたいへん強く呼び起こしてしまう点で、むしろ学生から「自由に思考する」余裕を奪ってしまう逆効果が強すぎるように思われた。結果として、講演時の新井氏の、よく仕組まれていながらその一方での飄々としたパフォーマンスは、学生に「思考する自由」をもたらす理想的な環境を提供してくれていたように思われ、この点からも新井氏でよかった、と思っている。

以下、まず前半で新井氏本人による当日の講演の要約を掲載する。そのあとで、檜田による「講演企画者の覚え書き」その他（文献表・資料等）を掲載することとする。

執筆分担は、「講演（要約版）」を新井氏（“小見出し”等一部は檜田）が、この「序文」と「覚え書き」、および「注」、「文献表」を檜田が執筆した。「資

料」の「シラバス」は、本授業の共同企画者である佐藤征弥氏（総合科学部自然システム学科）との共著である。なお、講演ビデオに基づく講演内容のテープ起こし作業及び原稿整理作業に関しては、瀬尾かおり氏（徳島大学総合科学部卒業生、榎田研究室研究員）の助力を得た。記して感謝する。

（榎田美雄）

【講演：インターセックスを男性寄り中性として生きる】

0. 講演の趣旨説明と講師の紹介

0-1 講演の趣旨説明

榎田：お手元に配布されたチラシに書いてあります通り、「徳島大学総合科学部学部共通科目『健康と福祉』特別講義」をはじめさせていただきます。本日の講演題目は、既に液晶プロジェクターで写っています通り、「インターセックスを男性寄り中性として生きる」です。

講師は、オフィス★怪人社代表新井 JAPO 氏（新井祥氏のこと）です。時間は講演で45分を予定しておりまして、その後、質疑応答にはいるのですが、質疑応答の冒頭、司会者のほうからコメントをのべて、立ち上げの部分をやっていきたいと思います。

0-2 講師の紹介

講師の紹介をいたします。新井先生は、漫画家・オフィス★怪人社の代表として活躍なさっている一方、インターセックス相談サイトの管理人として社会貢献的な活動もしていらっしゃいます。文献は、チラシの裏を見ていただきますと、最近の著作がいくつか載っております。

本日はこの後半のテーマで、今回ご講演を頂くわけですが、今回徳島大学のスタッフを中心として、文科省の経費を頂いておりまして、その「地域貢献特別推進事業」から、今回の企画に対しての支援を受けています。

まだ、授業開始早々で、先生をお迎えする前に十分準備することができませんでした。そういうことで、インターセックスに知識があまりないかたに

もわかるように発表してくださいとお願いをしていますから、あの、わからないというようなことがありましたら、手をあげていただければ質問の時間で応えて頂こうと思っております。私が長く説明するより新井先生にしゃべっていただいた方が良いと思いますので、よろしくお願いします。

1. インターセックスとは何か

新井：新井です。よろしくお願いします。

インターセックスというのは、体の性別や染色体の性別が男性でも女性でもない、ちょうど中間に生まれついてしまった人たちのことで、最近話題の「性同一性障害」とはまったく違ったものです。

「性同一性障害」というのは、もともとは正常な体の男性・女性で生まれているけど、何かの理由で途中から自分の性別が嫌になってしまい、違う性別に変えたいと願う、ところが異性の人たちをいいます。インターセックスの人と性同一性障害の人は、単語のイメージが似ているから間違えられやすいのですが、精神的にはある意味「真逆」。そういうふうに覚えてもらえるといいと思います⁽²⁾。

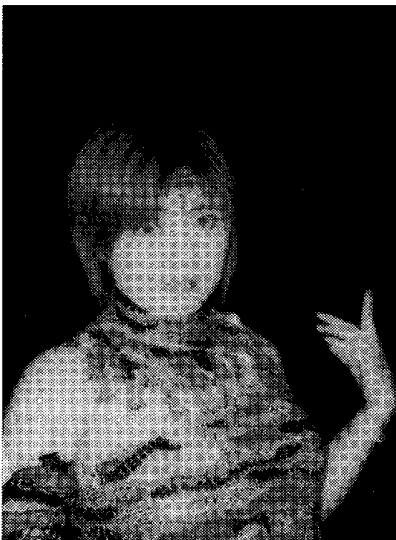


写真1：撮影日未詳



写真2：撮影日未詳

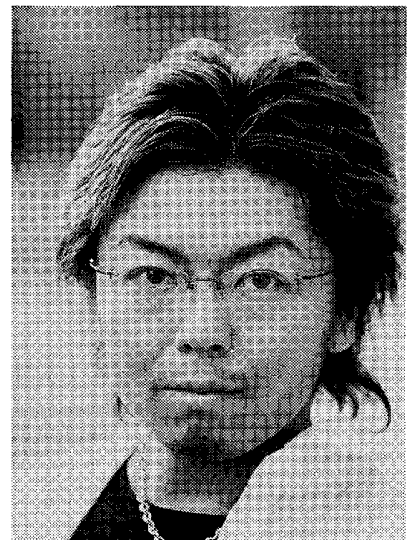


写真3:2004年夏
(撮影/高野 博)

2. 「性同一性障害」と「インターセックス」

現代人…特に若者なら、性同一性障害…いわゆる俗語で「オカマ」とか「オナベ」などと言われる人たちに関しては、テレビ・雑誌・インターネットなどの媒体で、ある程度のことは知ってはいるのではないかと思います。

しかし、インターセックスの人たちがテレビに出たり、雑誌に出たりしている姿は、見たことのない人のほうが多いのではないかと思います。インターセックスはダウン症などの染色体異常の子が生まれる確率のように、しょっちゅう産まれるものではないので、軽いものだと何万人に1人くらい、重いものだと何十万人、何百万人に1人とかいうふうになってきます。生まれる前に、また産まれてから死んでしまう子も多くいます。ですから、種の人口自体が少ないんですね。また仮に生まれても「自分はそうだ!」と気づかない人もいたり、知っても隠し通したりすることがほとんどなのではないかと思います。ひと昔前までは「フタナリ」と呼ばれて蔑まれたり、見世物にされたりしてたくらいですから、隠す人が殆どなのも仕方ないことだと思います。

僕の場合、自分の漫画やエッセイで半陰陽だということを発表して世間に「第3の性」の存在をアピールしていますが、どのセクシャルマイノリティー（性的少数派）の人たちも同じように堂々とカミングアウトするべきだとは思いません。静かに、余計なことは隠して一生を終えたいと思うのも、また正しいことだと思います。

3. インターセックスの体

インターセックスの体とはどんなものを具体的に説明しますと、胎児のうちになにかの変化がおきたり、どこかの時点でとまったまま…胎児はまだ性別が未分化ですから…産まれてきたり、薬害によってテストステロン過剰になってしまったり…染色体もまちまちですね。解りやすいのは、[見た目の] 男が女の XX, [見た目の] 女が男の XY の染色体だった場合ですが、

普通の配置でも性器のつくりがあきらかに違っていたり、XXでもXYでもなかったりなど、いろいろです。産まれた時点ではぱっと見正常でも、思春期に突然、違う性別の第二性徴があらわれたりする場合があります（僕はそのタイプです）。

外見は、大人になっても女の子っぽい、あるいは子供っぽいタイプが多いようです。女の子にしか見えない外見でも、出産はできない場合がほとんどです（なぜ出産と書いたかという、その後流れてしまっても、妊娠まではなんとかある場合があるからです）。ですから女の子の戸籍につけられた場合、気付かないまま結婚して、子どもが出来なくても「ああ不妊症なんだ。仕方がないな…」とかおもって一生を終えちゃってる人も多いと思います。

子宮も卵巣もある半陰陽者に女性ホルモンの投与をした場合、運良く出産できてもダウン症の子だった、という場合が多くあるようです。逆に言うとダウン症のお母さん達の中に、自分が知らないだけでそういう染色体をもった人が隠れてる可能性もありますね。そういった状態を避けるために、欧米では半陰陽者の出産を法律で禁止している国もあります。

4. 性自認について

何がノーマルか、アブノーマルかと決め付けて言う言い方は、差別につながるので最近だと憚られることが多いようですが、ここでは解りやすいように使用します。

半陰陽をはじめ、セクシャルマイノリティーに含まれる人種の場合、「ノーマル」な人たちとの違いが一番わかりやすく現れるのが「性自認」でしょう。性自認とは、自分が男なのか女なのか、どちらの自認を持ってるかって事で、普通に生まれ、女性ホルモンが優勢で出てる女の子は、少女の頃「男の子になりたいな」と思っても、いつのまにか男の子を好きになり、年齢をおうごとに女としての性自認が強まっていくものですし、逆に、男の身体で生まれて男性ホルモンがどんどん出てくると、子どものうちは「女の子になりたい」とか「スカートはきたい」といっても、いつのまにか女の人欲しくなり、

男としての性自認が育っていく…それが一般的な性自認を持つ人たちの姿かと思えます。

しかし中には自分の生まれついた性と真逆の性自認をもってしまう人もいます。それが「性同一性障害」。例えば、女の人として正常に産まれて女性として育ったのに、自分は男に違いないから性転換をしたい、逆に男の子の身体に生まれてきてるけれども、自分は女の子だからいつかは女の子に変わらないとおかしいと思う…GID（性同一性障害）の方々はそういう心理を持つわけですね。それはあくまで性自認の逆転であって、恋愛や性交を望む対象が男か女かということは関係ないところがポイントです。ですから、性転換して女になった男の人が、女の人を好きになって結婚、という話もよくあるわけですし、その場合、外見上はレズビアンカップルであっても、法律上は男女の戸籍だから全然問題ない状態となります。

5. インターセックスの性自認

さて、インターセックスの性自認はどうかというと、なぜだか…男でも女でもあるせいか、きっぱりとした性自認が育ちにくい人が多く、自分が女か男か、どちらか一辺倒にはあまり思えないっていう人が割合多いように感じます。「自分は男だ!」と思い込もうとしても、ホルモンの変動が来たときに、「いや? やっぱ女な気がする」とあっさり思ってしまう。それは、男性ホルモンも女性ホルモンも出ている場合が多いからでしょう。好きになる相手の性別も時期によって変わったり、また性交をした相手によって自分のホルモンバランスが崩れて大変動が起きたり…漫画の「らんま 1/2」のような状態が勝手に自分の中で起きてしまってるのが、インターセックスの人たちなわけなんですね（笑）。かくいう僕も、男性化していても、ひとたび男性と恋愛をすると、考え方や体つき、顔つきが女らしくなり、生理が来るようになるなど、「変身」してしまいます。

6. 性同一性障害について

「自分の性別を変えたい」と思う「肉体的には正常な」人々は、胎児の頃の脳の育ち方でそうなった人と、単なる逃避でそうなる人に分かれるようです。

そういう人たちの言葉を借りると「脳が異性だから、自分は異性だ」ということらしいんですが、問題は最初にあげた⁽³⁾「逃避で自分の性別を拒否してしまうタイプ」な気がします。(脳の要因で性同一性障害になるのは、特に男性の胎児に多いようですが、精神面の話ではなく生物学または脳医学的な話になってしまうのでここでは省略します)

逃避傾向のパターンは二つあります。

一つは「むくわれない同性愛者」。…恋愛の相手が異性以外に興味が無い、または同性愛者であるということできじめられた、などの理由で性転換を願うタイプ。これは、いざ完全に異性化したときに、自分の好きな自分像と違う、あるいは転換したのに愛が得られなかったなどの理由で、精神的に壊れてしまう場合が多く見受けられます。ニューハーフの自殺が多いのも、そのせいかもしれません。

もうひとつは「ある種のAD（アダルトチルドレン）な異性愛者」。…本当は普通の異性愛者なんだけれども、何かの理由（家庭環境とかいじめとかコンプレックスなどで問題を抱えたとき、周りの大人で正しい男女の姿をみれなかった、男女関係に関してすごい嫌悪感があるとかの理由）で、自分の性別を否定して、「男で大人になるって汚い」「女で大人になるって汚い」と思い込んでるタイプです。でもどうしても、性欲がむいてしまうのは肉体的に見た「異性」。このタイプは手術などで完全に変わってしまうことを恐れる傾向にあります。女装や男装にとどめています。

ジェンダーのゆらぎを感じている人およびジェンダーの解放を唱える人は、精神面こそすべてで、男になりたい、女になりたい、と思っている人には「じゃあ、そのように生きなさい」と言ってあげる場合が多いようです。心のあり方を大事にする…という、非常に聞こえは良いのですが、僕はそれはことと場合によっては非常に危険なことなのではないかと思っています

す。ただの逃避で性倒錯の世界に迷い込んでる人たちの、逃避傾向を増長させる可能性が高いからです。

僕はよくその類の相談を受けるので、わかりやすいように例を挙げて言うことにします。

クラスの中でとけ込めない…からかわれたりするし、もてない…その理由はたぶん自分が男だからいけないんだ、女になれば好かれるはずだもん、と思ってしまう男の子。

好きになった人とのエッチがあまりよくない、女の子に触れるほうが優しくて気持ちよさそうだと思う、子供を作る気がおきない…それはたぶん自分が女じゃなくて男だからだ！と思ってしまう女の子。

結婚して子供が出来、男としての責任をとらなければならなくなったら、男であることに嫌気が差し、女性として残る人生を歩みたいと思ってしまう男性。

ホモ・少年愛に憧れ、男女のまぐわいを不潔だと思うがゆえに男になりたいと願ってしまう女性。

こういう考えの人たちは、かなり多数存在します。…真面目に暮らしていた昔の人が聞いたら、全くなんて有様だ、地球は滅びるんじゃないか、と思ってしまうような惨状ですが（笑）これが現在の日本の真実です。

7. 僕からのメッセージ

今はインターネットで友達が作れて、沢山の情報を得られ、どんな変わったことでも「同好の趣」が見つかる時代です。それだけに、簡単に性のありかたも決めることができってしまう…セックスチェンジも、ただ思うだけでなく、病院の紹介などという、現実的な手段をもってあっというまに行えてしまう。

どういう性でもいい、誰かを不幸にしてセックスチェンジしたって、構わない。…ただ、それが単なる子供っぽい逃避や、流行に乗っただけのことではなければ、人はどう生きたって構わない、僕はそう思います。

男、女、の前に、まず強い「生き物」になれ、と…。これが僕からの最後のメッセージです。 (新井 祥)

【講演企画者の覚え書き】

1. 授業準備(1)

本授業の準備は、2002年11月からの約1年間の準備期間の間になされた。檜田は2002年9月に『健康と福祉』の授業担当の依頼を受けた後、まず、たちあげは「性」の話題で学生の関心を引きつけることが重要だと考え、秋の日本社会学会等で知人にどのような企画があり得るか意見打診してまわった。その過程で、「同性愛に関する情報の発信」等を趣旨としている「すこたん企画」を知った。さらに探索するなかで、「インターセックス」に関して相談サイトを開いていた新井祥氏（当時は「JAPO氏」）を知った。新井氏に、サイトで公開されていたメールアドレス経由でコンタクトを取り、東京出張時に「中野サンプラザ」で企画打ち合わせをおこなって、非常勤講師にきて頂くことを承諾してもらった。

2. 授業準備(2)

2003年度に入って、前期・後期の授業登録期には、全学共通教育の掲示板に授業宣伝の掲示をするとともに、医学部学生向けのチラシ作りと配布を行った。というのも、『健康と福祉』では「性」「生殖医療」「遺伝子組み換え作物」「精神障害」の4テーマをあつかっているが、医学部学生ならば、これらの各テーマを、総合科学部の学生よりも深く自分自身の問題として考えてくれるだろうと考えたからである。そして、そのような学生が教室内にいることが、総合科学部の学生にとっても、問題を自分の問題として考えるきっかけとして効果的に働くと考えられたからである。結果としては、医学部からは10名弱の参加が得られ、発言はわずかではあったが、教場の緊張感を高めるのに役立ったと思う。けれども、それ以上に驚きであったのは、総

合科学部の学生が学科を問わず、真剣に外部講師の話を聞き、試験準備に取り組んでくれたことである。これはうれしい誤算であった。

なお、講演の直前準備期間では、学生の「性的な生々しさに晒されない権利」(知りたくないことを知らないでいる権利、衝撃的な事実に接することを強制されない権利)をどう保証するかに気がついた。とりわけ本授業は、総合科学部の学部共通授業であり、総合科学部を卒業するためには、3科目の中から2科目を必ずとらなければならない。すなわち、実質必修授業といってもよい科目であり、選択性のあまりない科目で、どの水準まで「性的話題」を取り上げることができるかは、難しいところだと思う。もちろん、大学の授業には啓蒙的側面があってよい。したがって、学生は、社会の重要な問題に関しては、「知らないでいる権利」をある程度は制限されよう。しかし、同級生集団のなかで性的な話題に接することは、人によっては心理的衝撃の大きな事件であって、学生が予想外のショックを得て精神的混乱を来さないように十分な配慮が必要であった。

今回の講演ではこの危機管理と啓蒙の2つの要請をともに満たすために、講演の前に講師と若干の意見調整をおこなった。具体的には、「性的な内容に関しては、どうしても聞きたくない学生は、教室からの退出を認める」、「講師の性的指向、性的交渉の具体的ようすなどに関する質問はしないよう学生に前もって注意しておく」という2点の内容で合意しようとした。ただしこの件に関しては、檜田の説明の仕方が悪かったのか、「性的な内容を話すことを禁じられては話しづらい」というクレームが新井氏からあった。結果として、実際には「退出の権利」を告知せず、「性的な内容に関しても質問して構わない」という誘導をすることになった。今から振り返って考えると、配慮不足と言われる可能性が残る振る舞いだったかもしれない。

3. 授業総括（性に関する部分）

新井氏の講演を中心としたA部分（論文末「シラバス」参照）の授業企画の目的は、①インターセックス者の視点から近代社会における性別の2項

対立体制に関しての理解を得ることと、②インターセックス者の生と性に関して実際の内容の呈示にもとづいて、フロアを交えた討論をすること、③「性のグラデーション」という考え方に関してその可能性と限界を検討すること、の3つであったが、少なくとも①と②の課題に関しては、一定程度の成果を得たといえるのではないだろうか。

4. 講演補遺（要約されなかった部分としての「性のグラデーション」）

なお、「性のグラデーション」に関しては、今回の新井氏の要約ではあまりふれられていない。もしかしたら、現在（2004年）の新井氏の状況（「中性志向」を失いつつあること）と関係してのことかもしれないが、授業の組み立てとしては、「性のグラデーション」はキーワードであり、講演のひとつのポイントであった。したがって、このキーワードに関連した当日の議論の流れをここで少し補っておきたい。

新井氏は、昨年（2003年）の講演の前半で概略以下のような議論でもって、「性のグラデーション」という認識の意義を主張し、「中性認知のすすめ」を展開した（文責は檜田）。

[[「性のグラデーション」と「中性認知のすすめ」に関する講演中の新井氏の議論]

- ①ホルモンの数値が十人十色であるため、性にはグラデーションがある。
- ②インターセックスや性同一性障害ではなくても、人は「男」と「女」の両極にあるわけではない。むしろ、性のグラデーションのどこかに位置するものとみなされるべきである。
- ③性転換をしても完全に変わりきれない訳ではない。そもそも、インターセックスの人には「性転換」という概念はあてはまらない。ならば最初から「中間」を作ってしまう方がいいのではないか？
- ④「中性」の存在を認知することで、異性化願望に苦しむ人も減るし、差別も無くなる。これが、「中性」の認知を進める（例：住民票の性別欄撤廃等）私の主張である。

5. 講演が受容されたこと及びその受容性の意味

上述の新井氏の「中性」に関する議論は、新井氏が「講演（要約版）」でまとめて下さった一般的な「インターセックス」に関する議論の部分と緊密に結びつく形で講演全体の議論の骨格を形作っていたように思う。授業終了時のアンケートでも「中性という考えに賛成である」、「男、女以外に中性があっても良いのではないかと思った」等の声が多く寄せられていた。つまり、学生には少なくとも意見の水準では、新井氏の「性のグラデーション」の話および「中性のすすめ」の話は受け入れられていたといっていよいと思う。

しかし、学生が示したこの「受容性」は、もうひとつの現代社会の問題を表しているのではないだろうか。

新自由主義的競争社会化の大きな流れのなかで、すべての人間は、業績主義的に徹底的に「平等化」される。つまり、どのような身体的特徴をもっているか（属性）による差別ではなく、なにを達成したか（業績）による区別だけが、人間の取り扱いを決めていくようになる。そのなかで、「女」であることや「インターセックス」であることは、「業績」からみれば比較的小さな属性上の差異として、社会的にはその差異の意味が極小化されていく、そういう流れが背後にあるのではないだろうか。「人間としての平等」、「個人としての平等」を図る近代的な立場からは、「インターセックス」が、より標準的な「男性」や「女性」と同様の生活上の権利（法的に保護される権利および介入を拒否する権利）をもつべきであることは、当然のことである。しかし、それが、「中性」の文化や「インターセックス」の文化を産み出す方向ではなく、平等に競争する条件を整備する方向にだけ働くのだとすれば、必ずしも手放しで歓迎すべき現象ではないように思われる。新井氏には、本年（2004年）も講演にきて頂ける予定である。最近では「中性」よりは「男性」に近づいてきた、とサイト上に感想をあげている氏に⁽⁴⁾、「中性文化」の可能性について聞くことで、ここでの議論を更に発展させていきたいと考えている。

（樫田 美雄）

【注】

- (1) 同じマイノリティであっても、ネイティブ・サイナー（手話話者）としてのろう者には「ろうコミュニティ」があり、「ろう文化」が存在する[木村・市田2000][市田・樫田2000]。しかし、インターセックスは、その具体的様相がたいへんに多様でかつ、しばしば新生児期や幼少期に「当人の十分な承諾がないにもかかわらず！」外性器の矯正手術を行われてしまうことによって、人工的に身体操作されてしまい、外形的に顕著な特徴を喪失させられてしまうことの多い存在である。すなわち、「インターセックス」には、「コミュニティ」が想像的にしか存在しない可能性がある。たとえば、以下のような支援団体からの主張がある。インターセックスに関して、国内でもっとも精密な議論を展開している WWW サイト「日本インターセックス・イニシアティブ」によれば、インターセックスの定義は、まず生物学的に与えられる。すなわち、「外性器・内性器・内分泌系（ホルモン異常など）・そして場合によっては性染色体などが、『普通』とされる『男性』もしくは『女性』と異なる」場合が、インターセックスである。しかし、このような定義の意義はかれらにとって限定的なものとされており、「わたしたち[日本インターセックス・イニシアティブ：樫田注記]がインターセックスをひとまとめにして語るのは、これらの症状が生物学的に似通っているからではなく、これらさまざまな症状を持つひとたちが置かれた社会的状況が似通っているから」だ、という主張がなされている。つまりは、性的な原因によって苦しんでいるものの集まり、としてインターセックスは理解されており、そこには生物学的規定に優先するものとして社会学的規定が存在しているようなのである。私が本講義を企画するにあたって注目していたのは、じつはインターセックスのこの社会学的性質なのであった。

また、橋本秀雄氏の主導によって運営されている Pesfis 公式 WWW サイトでも、インターセックスの出生児に対し、中性として育てることは要求していない（成長につれて、出生時に当座の性として決定された性とは違った性に、当人の性自認がなっていく可能性があることに、十分留意するよう促しがあるだけである）。中性として生きる生活文化が現代日本には存在しないからであろう。このように、マイノリティ文化を支える実際的コミュニティが存在しない特殊なマイノリティとしての「インターセックス」に関して、その理解をすることができるのなら、他のマイノリティに関しての理解も原理的に前進することが予想された。この期待から、本授業で取り上げる対象としてインターセックスがとりわけ適切であると判断された。

- (2) 「インターセックス」と「性同一性障害」の関係については、[CHACO2001]

ほかを参照のこと (CHACO は新井祥氏の筆名)。我が国の「性同一性障害」の定義が、身体的正常性を前提としているため、この両者の関係を社会的に考えることが困難になっている点にまず注意をするべきである。そのうえで、思考を進めてみよう。まず、「インターセックス」だからといって「ジェンダー・アイデンティティ」の一貫性に問題が生じるとは限らない以上、「インターセックス」のすべてを「性同一性障害」として理解することは「性同一性障害」の定義をむりやり拡張しなければ不可能であると考えることができる。しかし、性同一性障害に「生物学的原因」によると見なせる場合があることを考えれば、「性同一性障害」をインターセックスの定義のうちに含める、という上記とは逆の包含関係は可能かもしれない [針間, 2003] [針間, 1999]。医学的なサポートを受けやすくする実践的観点からこちらの方向に議論が展開する流れが我が国でも生じ始めている。とはいえ、「性のグラデーション」仮説を採った場合、そもそも、「インターセックス」の定義を「生物学的に」おこなうことはできないはずだ、ともいえよう。日本インターセックス・イニシアティヴも同様の立場から、生物学的差異への還元主義を戒めている。

- (3) 講演要約中には割愛されて出てきていないが、この部分が言及しているのは、講演の冒頭にあった、インターセックス相談サイト『太極印相談医院』（現在は、『常夏天国』と改名された WWW サイト内で相談が継続されている）での相談者への感想であろう。新井氏は、医学的に整理された議論空間とはべつの議論空間としてのインターネット空間上で議論を積み重ねてきており、独自の見解を育ててきている。
- (4) 新井氏は、氏の WWW サイト（常夏天国）上の日記欄に、「書籍で述べたような中性指向はもはやない。男状態一辺倒だ。性的にも、受け身欲が急速になくなっていて、抱く側でしか想像が出来ない。女装なんてもうする気も起きない。俺の体はどこに向かっているのだろう？ 普通の親父になってしまうのだろうか？」（2004年9月18日付）と、氏の指向の変化に伴う当惑を述べている。

【文献】

- 新井 祥 2004 常夏天国（新井祥 HP <http://members.at.infoseek.co.jp/JAPO/top.html>）
- 新井 祥 2004 「〈シリーズ人間〉男性でもあり女性でもある“半陰陽・マンガ家・新井祥さん（33）告白」 in 『女性自身』通巻2182号（2004年10月5日号）。
- CHACO 2001 『カムアウトー胸取っちゃった日記ー』リイド社。（CHACO は、新井祥氏の筆名）

- 針間 克己 2003 「性同一性障害はインターセックスのサブタイプなのか」 in 橋本秀雄・花立 都世司・島津 威雄『性を再考するー性の多様性概論ー』青弓社：182-187。
- 針間 克己 1999 性同一性障害の心理療法(<http://www.harikatsu.com/coramu/13.html>)。
- 橋本 秀雄 1998 『男でも女でもない性ーインターセックス(半陰陽)を生きるー』青弓社。
- 市田 泰弘, 檜田 美雄 2000 「言語としての手話・文化としてのろう」『徳島大学社会科学研究所』13:53-80。
- 金澤 貴之, 檜田 美雄, 上農 正剛, 岡田 光弘, 西澤 弘行 2001 「ろう文化と社会学ー聴者によるろう文化理解は果たして可能か?ー」『徳島大学社会科学研究所』14:1-53。
- 檜田 美雄・佐藤 征弥・JAPO・梶 博・大塚 善樹 2004 「健康と福祉・シラバス」(<http://dmuseum.ias.tokushima-u.ac.jp/%7Esyllabus/>)から検索可能。
- 木村 晴美・市田 泰弘 1998 『はじめての手話』日本文芸社。
- 木村 晴美, 市田 泰弘 2000 「ろう文化宣言：言語的少数者としてのろう者」 in 現代思想編集部編『ろう文化』青土社。(初出は『現代思想』23-3:354-362.)
- 中塚 朋子2004 「自己同一性と動機の語彙ー「本当の自分」言説を分析するための理論的枠組みー」『人間文化研究年報』19号:193-201。
- 日本インターセックス・イニシアティヴ WWW サイト2004
(<http://www.intersexinitiative.org/japan/>)
- 日本半陰陽者協会(半陰陽の子ども達とその家族のセルフヘルプグループ PESFIS [Peer Support for Intersexuals]) WWW サイト2004(<http://home3.highway.ne.jp/pesfis/>)
- 大西 純・橋本 秀雄 (作成年不明)「半陰陽者ハッシーさんインタビュー」
<http://ajapa.hp.infoseek.co.jp/daiichi/hassy1.html> アジャパー WEST サイト)
- 佐倉 智美 1999 『性同一性障害はオモシロイー性別って変えられるんだヨー』現代書館。
- 佐倉 智美 2002 『女が少年だったころーある性同一性障害者の少年時代ー』作品社。
- セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク2004(<http://homepage3.nifty.com/stn/>)
- 相馬 佐江子編, 針間 克己監修 2004『性同一性障害30人のカミングアウト』双葉社。
- 杉浦 郁子 2002 「「性」の構築ー「性同一性障害」医療化の行方ー」,『ソシオロジ』46-3:73-90。
- 虎井 まさ衛・宇佐美 恵子1997 『ある性転換者の記録』青弓社。

【資料:『健康と福祉』シラバス】

[授業区分・単位数など] 学部共通科目 1年, 2単位 後期 金 3・4

[担当授業科目] 健康と福祉

[担当者] ○榎田美雄・○佐藤征弥・JAPO・梶博・大塚善樹 (武蔵工業大)

[他学部・他大学からの受講] 可

[授業のテーマ] 『健康と福祉』を総合科学部的に考える！

[授業の目的と趣旨]

「健康と福祉」について、基本的な知識を与えつつ、さらに問題を学際的に検討することを通して、総合科学部的に思考することの基本的なイメージを獲得してもらうことがこの授業の目的である。学部共通科目は1年次生に対する（選択）必修授業であるので、学部が調達できる最大限の資源（出席管理に関する事務の手厚いサポート、とびきりの外部講師、等々）を投入して規律と活気のある授業運営をしていきたい。外部講師の先生（JAPO、梶、大塚の各氏）の話は、総合科学部的に問題を感じ取るセンスを磨くのに活用して欲しい。内部講師（佐藤および榎田）の解説部分では、総合科学部的思考のありようを学んで欲しい。討論の時間もなるべく設けるようにしたいので、学生諸君の積極的な授業参加を期待している。

[到達目標]

総合科学部的に理解し、感じ、考えぬくことの体験。および、そのために必要な知的基礎体力の獲得。

[授業の内容と計画]

本講義では、以下の4つのトピックを論ずる。

A：性の問題

B：遺伝子診断，クローン技術，生殖医療について

C：遺伝子組換え作物の現状と課題

D：心は分子生物学で解明されるか？，あるいは，「精神障害者」の現代的状況

具体的には以下のスケジュールですすめる予定である。A（10月中）：性の多様性，あるいはインターセックス（半陰陽）について，具体的には，性の決定と性を生きることの間にある相違について。B（11月中）：遺伝子診断および生殖医療について，具体的には，出産における医療と福祉について。C（12月中）：遺伝子組み換え作物について，具体的には，大塚善樹講師の科学社会学的主張の検討。D（1月中）：「精神障害」について，具体的には，分子生物学から見た心のメカニズムの話及び，精神障害者とともに生きるとはどういう事かということの検討（『浦河べてるの家』関連ビデオを上映する予定）。各トピックの最終日に小テストを実施（計4回）。2月4日には試験結果の返却と，総括討論を予定。

インターセックスと性のグラデーション

[受講上の注意事項]

多数の受講生数が予想されます。しかし、出席を毎回取ります。この作業をスムーズに行うため、さらには、私語対策の意味から、座席指定制をとる可能性があります。90分を有効活用したいので、授業開始時には、指定の席に着席しているようにして下さい。なお、授業の活性化のために、全学共通教育の「学部開放科目」にも指定しました。とりわけこのテーマに関心が深いと思われる蔵本地区（医学部・歯学部・薬学部）学生の参加がある程度見込まれます。刺激しあうと同時に仲よくして下さい。

[教科書、教材、参考書等]

教科書はありません。参考文献（の一部）は、以下の通り。

橋本秀雄 1998『男でも女でもない性—インターセックス（半陰陽）を生きる』青弓社。

CHACO（新井祥氏の筆名）2002『カムアウト—胸取っちゃった日記—』リイド社。

大塚善樹 1999『なぜ遺伝子組換え作物は開発されたか』明石書店。

大塚善樹 2000「遺伝子組換え作物論争における対抗的公共性—米国FDA公聴会を事例して」『広島経済大学研究論集』23巻2号, 13-29.

大塚善樹 2001『遺伝子組換え作物—大論争・何が問題なのか』明石書店。

大塚善樹 2001「GM農作物・食品に対する人びとの懸念」『農業と経済』7月号(67巻8号), 47-54.

大塚善樹 2001「緑の遺伝子機械—物と人の政治学」『現代思想』8月号, 129-143.

浦河べてるの家 2001『精神分裂病を生きる(6) 幻覚とも妄想とも仲よく暮らす』（ビデオテープ, ベリーオーディナリーピープル制作委員会）

[成績評価の方法]

4回の小テストおよび出席。加点に用いるためのレポートを課す場合もある。

[再試験] なし

[オフィスアワー] 榎田は火曜日14時～15時。佐藤は部屋にいるときにはいつでもOK。